

1982年～2021年における未婚状態の類型

－「前駆型」「解放型」「剥奪型」「離脱型」の構成変化とその特徴－

Classification of Never Married Singles: 1982-2021

岩澤 美帆¹・余田翔平¹

(1. 国立社会保障・人口問題研究所)

IWASAWA Miho¹, YODA Shohei¹

(1. National Institute of Population and Social Security Research)

iwasawa-miho@ipss.go.jp

1. 背景と目的

日本におけるここ数十年の婚姻発生の低迷と未婚者割合の上昇は、統計上疑う余地はない。しかしながら、この未婚化の解釈をめぐっては様々な捉え方が併存している。例えば、未婚化は性別役割の遂行や扶養負担からの解放だとする見方がある。一方で、未婚化は社会的資源が少ない層で起きており、安定的な生活を可能にする結婚の剥奪であるとの見方もある。さらには、米国における貧困女性の質的調査などから明らかになったように、身近な相手との結婚は問題や負担を増す可能性が高く、結婚という選択肢が消滅した結婚からの離脱が起きている可能性もある。そこで本報告では、全国標本調査である「出生動向基本調査」(国立社会保障・人口問題研究所)の25～34歳の未婚男女の情報を用いて、未婚状態を分類し、過去40年間にわたるその構成の時代変化を捉えることを目指した。

2. 方法

まず、結婚の移行に必須の3つの側面－経済的基盤 (Economic base)の有無 (正規雇用／自営業か)、親密性基盤(Intimacy base)の有無 (恋人がいるか)、結婚意欲 (Marriage intention) (結婚するつもりか)－を観察した。そしてこれらの条件を組み合わせ、未婚状態を4類型に分類した。経済的基盤も親密性基盤も結婚意欲もあるケースは、結婚への準備が整った「前駆型未婚」(EIM)とした。両基盤が揃っているものの結婚意欲がない場合は「解放型未婚」(EIm)とした。「剥奪型未婚」は、結婚意欲はあるが何らかの基盤を欠く場合(EiM, eIM,,eiM)とし、「離脱型未婚」は基盤の欠如に加え、結婚意欲もない場合とした (Eim, eIm, eim)。

3. 結果

1980年代以降の未婚化は、基盤も結婚意欲もある「前駆型」の増加からはじまり、1990年代以降は経済的基盤の欠如による「剥奪型」の増加が見られた。そして2010年以降、経済的基盤の欠如状態はやや緩和したものの、親密性基盤の欠如による「剥奪型」の増加が見られている。また同時期には、基盤も欠け、かつ結婚意欲もない「離脱型」が急増し、2020年前後の未婚化に寄与していた。なお観察期間を通じて「解放型」の未婚は希少であった。

さらに、未婚の類型によって、結婚や子どもを持つことに対する考え方や、結婚を妨げる事情が異なっていた。「前駆型」と「剥奪型」の未婚者の平均子ども数は、2000年代前半以前は、ほぼ同水準で、わずかに低下しながら推移していた、しかし2010年以降は、「剥奪型」の未婚者の平均希望子ども数が相対的に低く推移している。「離脱型」の未婚者の希望子ども数の平均値は先の2グループに比べ顕著に低く、かつ急激に低下している。日本では、米国と異なり結婚の実現可能性と生殖意欲が強く結びついており、結婚からの離脱は再生産からの離脱にもなっている。